Tsukuba Psychological Research
1995, **17**, 99-104

愛他行動場面における自己責任性の認知の影響

筑波大学大学院(博)心理学研究科　広田　信一

筑波大学心理学系　新井邦二郎

The effects of cognition of responsibility in altrulistic situations

Shinichi Hirota and Kunijirou Arai *(Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan)*

The purpose of this study was to investigate what factors can influence the cognition of responsibility in altrulistic behavior. Seventy fourth grade elementary school children were asked to evaluate several situations. The situations were made up of four factors: familiarity, bystander, fault of helpee, and fault of helper. The results of this study indicate that all the factors influence cognitions of responsibility in altrulistic behavior.

Key words: responsibility, altruism, school age children.

はじめに

愛他行動の自己責任の認知が，愛他行動の遂行に影響を持つことは，Schwartz らによって指摘されている．Schwartz & Howard (1984)は，愛他行動の決定における防衛段階において，自己の行動を抑制するものとして責任性の否認を挙げている．さらに責任性の否認によって自己の愛他行動は抑制され，また行動を抑制することで責任性の認知が影響される循環的な過程を主張している．

ところで従来の愛他行動研究で問題とされてきた責任(responsibility)は，性格特性的な責任であった．これはある個人が恒常的に持っている責任感と呼ばれるようなものであり，しばしば責任感が強いとか，責任感がないと記述されるような個人の性格的傾向であった．

先述の Schwartz & Howard (1984)でとりあげられている責任性も，規範的価値と結びついた責任性であり，状況特定的な要因というよりむしろ個人内要因としてとりあげられている．

しかし，愛他的場面そのものが，自己の責任性を賦活したり，減退させたりすることが考えられる．例えば Weiner (1980)は，原因帰属の次元で 2 種類の条件を提示し愛他行動を検討している．大学生が友人に講義ノートを借りるような状況で，一方は学業に対する努力が不足しているためにノートを借り，他方は身体的にノートをとる能力がないためにノートを借りる条件であった．その結果，努力不足の方は，怒りの感情に結び付き，無視されることになった．また能力の不足の方は，哀れみの感情と結び付き，ノートを貸すといった行動と関連があった．これは愛他行動を引き起こす状況によって，愛他行動の決定が影響を受けることを示している．

ところでこの結果の解釈において，責任性の概念と混同しやすいものとして，必要性の概念がある．被援助者がどのくらい困っているのかという観点(必要性)からの検討は，広田(1992)によってなされている．この場合被援助者の必要性とは，被援助者がどの程度困難であるかという物理的な基準を用いた．その結果物理的な困難の程度によって，愛他行動者の行動の決定に影響があった．この結果と先の Weiner の実験を比較検討するならば，困っている人(ノートを借りたい人)の状況はまったく同様である．したがってノートを貸すといった行動が生起するかどうかは，被愛他行動者と愛他行動者との関係性の中で決定したことが推測できる．この場合少な

くとも，被愛他行動者が困難な状況に陥った原因を愛他行動者が推測し，不可抗力か，あるいは過失かについての認知が，愛他行動の決定に影響を及ぼしたことになる．この過程を責任という観点から見直すならば，不可抗力による困難では，自分が行動しなくてはならないと思いやすいし，過失が被愛他行動者にあった場合の困難には，自分が行動することはないという判断が働いた可能性がある．

したがって，愛他行動を行うかどうかは，愛他行動者と被愛他行動者のある状況下での関係性が問われていると考える必要がある．そこで愛他行動者と被愛他行動者の二者関係の関係性に影響を及ぼす要因にはどのようなものがあるのか検討を加える必要がある．上述のWeinerでは，被愛他行動者の過失によって愛他行動を遂行しなくてはならない状況が生じたが，これとは逆に愛他行動者の過失によって愛他行動を遂行する状況が生じる可能性もある．例えば，連絡することを忘れたために，絵の時間に絵の具を持ってくることを忘れた人がいるといった状況である．

また，二者関係において相手のことをよく知っているのか，または知らないのかといった親密度が影響する可能性もある．日常生活において，よく知っている人が困っているときは，援助しやすいであろうことは予測できるが，このような二者の関係が責任を賦活するかについては検討する必要がある．

そのほかの要因として，愛他行動者と被愛他行動者の二者関係をさらに取り囲む第3者の存在(他者の存在)が考えられる．川島(1991)では，他者の存在の有無によって児童の寄付量が異なることを報告している．しかしなぜ寄付量が変化するかについて，認知的な要因は特定されてはいなかった．

そこで，本研究では自己責任性を性格特性として捉らえるのではなく，自己の責任性を状況特定的なものとしてとりあげ検討を加える．本研究における自己責任性とは，上述の理由からある愛他行動を刺激する場面で，愛他行動を遂行する愛他行動者が認知する責任である．

目　的

愛他行動を決定する過程において，責任性の重要性は先行研究においても指摘されてきた(Schwartz & Howard, 1984)．しかしどのような要因が自己責任性の認知に影響を与えるかについては，検討されてこなかった．そこで自己責任性の認知に影響を与えると思われる要因を検討することが本研究の目的である．自己責任性の認知に影響を与える要因として本研究では，①親密度，②被愛他行動者の過失，③愛他行動者の過失，④他者の存在についてとりあげる．親密度とは，愛他行動者と被愛他行動者の人間関係の程度である．被愛他行動者の過失とは，困難な状況を生みだした原因に被愛他行動者の過失があることである．愛他行動者の過失とは，困難な状況を生みだした原因に愛他行動者の過失があることである．他者の存在とは，困難な状況に愛他行動者と被愛他行動者以外の第三者が存在することである．これらの要因が自己責任性の認知に影響を持つ要因であるかを検討する．

方　法

(1)　被験者　長野県の小学校4年生70名

(2)　道具

愛他行動場面の選定とその種類　広田(1992)に従い，愛他場面を物質的愛他場面と労力的愛他場面の2つの愛他場面とした．

質問紙　各愛他場面において，①親密度の高低，②被愛他行動者の過失の有無，③愛他行動者の過失の有無，④他者の存在の有無の各要因にしたがい，刺激文を作成した．それらの刺激文は，物質的愛他行動場面では，「遠足のお菓子を忘れる」文脈と「図工の道具を忘れる」文脈の2つが作られ，労力的愛他場面では「下校時の怪我」文脈と「そうじのごみ捨てを手伝う」文脈の2つが作成された．このように2場面(物質的愛他場面，労力的愛他場面)×2文脈×4要因に基づき，32の刺激文が作成された．

質問紙一枚には，自己責任性の各要因についてとりあげた2刺激文が印刷された．またこれらの質問紙の提示順序は一定とせず，被験者によって変えられた．各刺激文の中の子供の名前は異なるようにしてあり，男子用には男子の名前が，女子用には女子の名前が用いられた．また刺激文の条件毎に，要因を表す部分には下線が引かれた．なお本研究で用いられた刺激文は次のようなものである．

例)　物質的愛他場面

被愛他行動者との親密度(高)条件

<u>いつもいっしょに遊んでいる</u>，なおきくんが，遠足でおかしを全部忘れてきてしまいました．

被愛他行動者との親密度(低)条件

<u>あまり遊んだことのない</u>，しょうたくんが，遠足でおかしを全部忘れてきてしまいました．

ここで用いられた刺激文は，Table 1に示した．

自己責任性の評定　「あなたは，主人公(なおき君，しょうた君)をどのくらい助けなくてはなりませんか」との質問項目に「たくさん助けなくてはならな

Table 1　愛他行動刺激場面(男子用)

1．物質的愛他場面

「遠足のお菓子」文脈

(親密度)

- 遠足にいったとき，いつもいっしょに遊んでいる，同じクラスのひろしくんが，おかしを全部忘れてきてしまいました。(高)
- 遠足にいったとき，あまり遊んだことのない，同じクラスのゆたかくんが，おかしを全部忘れてきてしまいました。(低)

(被愛他行動者の過失)

- 遠足にいったとき，同じクラスのみちおくんは，おかあさんが用意してくれたおかしを家にうっかり忘れてきてしまいました。(有り)
- 遠足にいったとき，同じクラスのたかひろくんは，おかあさんが買い忘れたために，おかしを持ってくることができませんでした。(無し)

(愛他行動者の過失)

- 遠足にいったとき，同じクラスのかずおくんは，朝あわてていたために，おかしを持ってくるのをわすれてしまいました。(無し)
- 遠足にいったとき，同じクラスのたつやくんは，あなたがれんらくするのをわすれたので，おかしを持ってこれませんでした。(有り)

(他者の存在)

- 遠足にいったとき，同じ班のじゅんくんは，おかしを家に忘れてきてしまいました。遠足の班にはあなたの他に4人のともだちがいます。(有り)
- 遠足にいったとき，同じ班のひでおくんは，おかしを家に忘れてきてしまいました。遠足の班には，ひでおくんとあなたしかいません。(無し)

「図工の忘れ物」文脈

(親密度)

- いつもいっしょに遊んでいる，同じクラスのあつしくんが，図工の道具をわすれてきました。(高)
- あまり遊んだことのない，同じクラスのさとしくんが，図工の道具をわすれてきました。(低)

(被愛他行動者の過失)

- 同じクラスのゆきおくんは，うっかり図工の道具を家にわすれてきました。(有り)
- 同じクラスのとおるくんは，おかあさんがどこにかたづけてしまったかわからなかったために，図工の道具を持ってくることができませんでした。(無し)

(愛他行動者の過失)

- 同じクラスのみちおくんは，朝あわてていたために，図工の道具を持ってくるのをわすれてしまいました。(無し)
- 同じクラスのよしのりくんは，あなたがれんらくするのをわすれたので，図工の道具を持ってこれませんでした。(有り)

(他者の存在)

- 同じ班のまことくんは，図工の道具を持ってくるのをわすれました。同じ班にはあなたのほかに4人の友だちがいます。(有り)
- 同じ班のさちおくんは，図工の道具を持ってくるのをわすれました。同じ班にはさちおくんとあなたしかいません。(無し)

2．労働的愛他場面

「下校時の怪我」文脈

(親密度)

- あなたが，学校から帰るとちゅう，いつもいっしょに遊んでいる，同じクラスのひとしくんが，みちばたで足にけがをしていました。(高)

〈つづく〉

〈Table 1 のつづき〉

- あなたが，学校から帰るとちゅう，あまり遊んだことのない，同じクラスのてつおくんが，みちばたで足にけがをしていました。(低)

(被愛他行動者の過失)

- あなたが，学校から帰るとちゅう，同じクラスのやすしくんが，自慢しようと高いところからとびおり，足にけがをしていました。(有り)
- あなたが，学校から帰るとちゅう，同じクラスのよういちくんが，捨ててあったジュースのかんにつまずいて，足にけがをしていました。(無し)

(愛他行動者の過失)

- あなたが，学校から帰るとちゅう，同じクラスのけいいちくんは，石につまずいて，足にけがをしています。(無し)
- あなたが，学校から帰るとちゅう，同じクラスのけいじくんは，あなたといっしょに遊んでいて，あなたのなげた石にあたって，足にけがをしてしまいました。(有り)

(他者の存在)

- あなたが，学校から友だち4人といっしょに帰るとちゅう，あきらくんが，みちばたで足にけがをしました。(有り)
- あなたが，学校から二人だけで帰るとちゅう，いさむくんが，みちばたであしにけがをしてしまいました。(無し)

「そうじのごみ捨て」文脈

(親密度)

- いつもいっしょに遊んでいる，同じクラスのみのるくんが，そうじが終わった後のごみ捨てにいくことになりました。ごみは，一人で運べない量でした。(高)
- あまり遊んだことのない，同じクラスのゆういちくんが，そうじがおわった後のごみ捨てにいくことになりました。ごみは一人で運べない量でした。(低)

(被愛他行動者の過失)

- 同じ班の，のりゆきくんは，そうじが終わった後，たくさんのごみを捨てにいくことになっています。のりゆきくんは，そうじの時間中ふざけていました。(有り)
- 同じ班の，ゆきおくんは，そうじが終わった後，たくさんのごみを捨てにいくことになっています。ゆきおくんは熱心にそうじをしましたが，うでにけがをしていて一人では運べません。(無し)

(愛他行動者の過失)

- 同じ班の，けいたくんが，そうじが終わった後，ごみを捨てにいくことになっています。けいたくんは，きのうふざけていて，うでにけがをして一人でごみを運べません。(有り)
- 同じ班の，たつおくんは，そうじが終わった後，ごみを捨てにいくことになりました。たつおくんは，きのう，あなたといっしょに遊んでいるときに，あなたのなげたボールにあたって，うでにけがをしました。そのため一人では，ごみを運べません。(無し)

(他者の存在)

- 同じ班のひできくんは，そうじが終わった後，ごみを捨てにいくことになりました。ごみが多くて，一人だけでは運べない量でした。同じそうじの班の中で，あなたしかその場に残っていません。(無し)
- 同じ班のくにひこくんは，そうじが終った後，ごみ捨てにいくことになりました。ごみが多くて，一人だけでは運べない量でした。同じそうじの班には，あなたのほかに4人が残っています。(有り)

注）女子用には女子の名前が用いられている

い」から「ぜんぜん助けなくてもよい」までの5段階の評定を求めた．

(3)　手続き

実験は，集団形式で実施された．まず実験者が教室に入室し，質問紙を配付した後，「これは，テストではありません．だから正しい答えはありません．あなたが思ったとおりに答えてください．あなたがどのように答えたかについてはだれにも言いません」という教示がなされた後，練習用の問題に移り，さらに「このアンケートは，一枚につき2つの文章

がでています．まず紙をめくったら2つの文章を読んでから，質問に答えてください．」という教示がなされた．練習問題で実施方法についての説明を確認した後に各被験児のペースで，質問紙に答えさせた．回答時間は10分から35分の範囲であった．

結　果

回答に不備のなかった67名を分析の対象とした．次に各条件を構成する刺激文は，2つの異なる文脈から構成されているので，2文脈の合計得点を求め，各要因ごとに場面(物質的愛他場面，労力的愛他場面)×程度(高低，あるいは有無)の分散分析を行った．Table 2は，各条件における平均値と標準偏差を示したものである．

Table 2　自己責任性の認知の平均値と標準偏差

	平均	標準偏差
〈親密度〉		
物質　高	9.03	1.49
物質　低	8.10	1.76
労力　高	9.22	0.97
労力　低	8.44	1.29
〈被愛他行動者の過失〉		
物質　なし	8.50	1.64
物質　あり	7.91	1.75
労力　なし	9.28	0.92
労力　あり	7.14	1.88
〈愛他行動者の過失〉		
物質　あり	9.35	1.35
物質　なし	8.16	1.54
労力　あり	9.70	0.93
労力　なし	8.67	1.23
〈他者存在〉		
物質　なし	9.10	1.29
物質　あり	8.05	1.61
労力　なし	9.19	1.17
労力　あり	8.56	1.42

注）物質＝物質的愛他場面
　　労力＝労力的愛他場面

親密度　親密度において分散分析を行った結果，程度の主効果が有意であった($F(1,66)=33.34$, $p<.01$)．

被愛他行動者の過失　被愛他行動者の過失において分散分析を行った結果，場面×程度(有り，無し)の交互作用が有意であった($F(1,66)=33.21$, $<.01$)．そこで各要因の単純主効果を分析した結果，程度有り条件における場面の効果($F(1,66)=23.03$, $<.01$)，程度無し条件における場面の効果($F(1,66)=13.47$, $<.01$)，物質的場面における程度の効果($F(1,66)=9.60$, $<.01$)，労力的場面における程度の効果($F(1,66)=114.59$, $<.01$)が有意であった．

愛他行動者の過失　愛他行動者の過失において分散分析を行った結果，場面の主効果($F(1,66)=9.57$, $<.01$)，程度(無し，有り)の主効果($F(1,66)=62.19$, $<.01$)がそれぞれ有意であった．

他者の存在　他者の存在において分散分析を行った結果，場面×程度(無し，有り)の交互作用が有意であった($F(1,66)=6.32$, $<.05$)．そこで各要因の単純主効果を分析した結果，程度無し条件における場面の効果($F(1,66)=12.02$, $<.01$)，物質的場面における程度の効果($F(1,66)=28.58$, $<.01$)，労力的場面における程度の効果($F(1,66)=17.09$, $<.01$)が有意であった．

考　察

自己責任性の認知の各要因における程度(高低，有無)が異なることによって有意な差が見られた．すなわち，親密度の高低，被愛他行動者の過失の有無，愛他行動者の過失の有無，他者の存在の有無のいずれもが自己責任性の認知に影響を持つことが確認された．しかし愛他行動の文脈が異なった場合，同じ要因について異なる影響が見られた．このことは本研究で用いた要因は確かに自己責任性の認知に影響は持つが，文脈の異なりによって責任性の認知が影響を受けることを示唆している．

変数ごとに結果を見てみると，親密度は高い場合の方が低い場合より，自己責任性の認知が高かった．この理由として，相手が親密な人物の場合の方が，あまり知らない人物より共感性が高まり，それが自己責任性の認知へと導くことが考えられる．また互恵性の原理の中で，友人を助けることによって自分も助けてもらえるかもしれないといった推測が働き，このことが自分も友人を助けなくてはならないと思うのかもしれない．さらに親密な友人が困っている場合，自分が助けなくて他の誰が助けるのかという気持ちも働くのかもしれない．

また被愛他行動者の過失が有る場合の方が，無い場合よりも自己責任性は低かった．また愛他行動者に過失が有る場合，無い場合より自己責任性は高かった．これは困難な状況に陥った原因によって帰属が異なり，その違いが自己責任性の認知に影響を与えたと考えられる(e.g. Meyer, R. & Mulherin, A. 1980)．被愛他行動者の不可抗力によって困難な状

況が生じた場合や，愛他行動者の過失によって困難な状況が生じた場合，愛他行動者自身が愛他行動を遂行する責任を感じやすくなるといえるであろう．

他者の存在は，存在しない場合の方が存在する場合より，自己責任性の認知は高かった．他に助ける人のいない場面では，愛他行動者自身の行動によって状況が支配される可能性が高い．したがって状況に対する関与度が高まることで責任性が生起しやすいのかもしれない．また，責任の分散も生じにくくなると思われる．

本研究では，ある状況が愛他行動の責任性に与える影響について検討してきた．しかし幾つかの点で今後の検討が必要である．第一に自己責任性の認知がどのように獲得されて行くのかといった発達的問題である．

本研究で示したように責任性の認知は，かなり状況の影響を受けることが想定できる．このような状況に対する子供の認知がどのように発達していくのかについて今後詳細に検討する必要がある．

また自己責任性の認知は，他の認知的な決定要因とどのような関係にあるのであろうか．例えば責任性の認知が高い場合でも，必要性の認知が低ければ，愛他行動の遂行自体に影響があると思われる．したがって他の認知的要因との関連性についても今後検討していきたい．

引用文献

川島一夫　1991　愛他行動の認知機能の役割　風間書房

広田信一　1992　愛他場面における必要性および自己責任性の認知が愛他行動の決定に及ぼす影響　筑波大学心理学研究科修士論文

Meyer, R. & Mulherin, A. 1980 From attribution to helping: An analysis of mediating effects of affect and expectancy. *Journal of Personality and Social Psychology,* **39**, 201-210.

Schwartz, S.H. & Howard, J.A. 1984 Internalized values as motivators of Altruism. In E. Staub, & D. Bar-Tal, J. Karylowski, & J. Reykowski, (Eds.) *Development and maintenance of prosocial behavior.* New York and London: Plenum Press.

Weiner, B. 1980 May I Borrow Your Class Notes?: An Attributional Analysis of Judgements of Help Giving in an Achievement-Related Context. *Journal of Educational Psychology,* **72**, 5, 676-681.

—1994．9．30受稿—